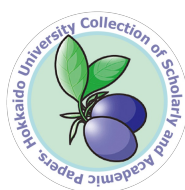




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	合わせ鏡の間に立って - 科学ジャーナリストの視点から - 対談
Author(s)	大内田, 美沙紀; OUCHIDA, Misaki; 須田, 桃子 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 34, 87-93
Issue Date	2024-03
DOI	https://doi.org/10.14943/109335
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91395
Type	departmental bulletin paper
File Information	jjsc34_08_Ouchida.pdf



ノート：寄稿

合わせ鏡の間に立って ～科学ジャーナリストの視点から～ 対談

大内田 美沙紀¹, 須田 桃子²

Standing in the Middle of Two Mirrors
: From the Perspective of a Science Journalist

OUCHIDA Misaki¹, SUDA Momoko²

キーワード：科学ジャーナリズム，科学広報，研究不正，

Keywords: Science Journalism, Science Public Relations, Research Misconduct

1. 二つの論文不正を比較して

大内田：まずは、この度対談をさせていただき私，大内田と須田さんとのご縁についてご紹介したいと思います。実は私，2022年夏まで京都大学 iPS 細胞研究所の国際広報室でサイエンスコミュニケーターをしていました。そして在籍中，何度か毎日新聞（当時）の須田さんと研究者への取材対応などでやり取りさせていただいた覚えがあります。いま，こうして2人とも所属と立場が変わって再びあいまみえているというわけです。

大内田：論文不正という重いテーマですが，せっかくの機会なので，不名誉ではありますが，私の前職，iPS細胞研究所の論文不正についても紹介したいと思います。

2014年のSTAP細胞事件から4年後の2018年に，iPS細胞研究所でも論文不正が起こってしまいました。ただ，iPS細胞研究所の論文不正は非常に残念な件ではありますが，その対応については須田さんにモデルケースとなる事例



2023年5月13日北海道大学 CoSTEP19期の開講式特別プログラムとして標題の対談が行われた

2023年12月15日受付 2023年12月15日受理

所 属：1. 北海道大学 大学院教育推進機構 オープンエデュケーションセンター CoSTEP
2. NewsPicks

*所属はシンポジウム開催当時

連絡先：misakiouchida@open-ed.hokuda.ac.jp

と評価していただいています。著書を引用しますと、「論文不正をした研究者が小保方氏のように検証実験の実施を求めたのに対し、調査委はその必要性は認めず、あくまで論文の元となったデータを調査する姿勢を維持しました。山中伸弥教授（当時の iPS 細胞研究所 所長）も当初から同じ方針で、調査委の一人である齊藤教授も『論文に不正があったとしても、結果が再現できればよい、という考え方になっては良くない。論文中のデータの調査で完結させなければ調査も長引き、世界中の研究者に迷惑をかける』と説明した」（須田 2015, 442）とあります。ちなみに須田さんは、この不正に関しても取材をされたのですか？

須 田：はい、そうですね。事件発表の後なのですけれども、調査委員会の齊藤先生をはじめ、調査員の主要メンバーの方々に集まっていただいて、どういった調査を、どういった方針でなされたのかということを取材させていただいて記事にしました。

大内田：STAP の時のように第三者への取材はされなくて、もう直接ですか。

須 田：そうですね。この時というのは、STAP の時とまた全然違って、研究者の発表という時に世間が、メディアもどこも初めて知ったのです。しかも、いろいろなことがもう調査の報告の中で明らかにされていたので、それ以上の取材というのはしませんでした。厳密にはちょっとしましたが（笑）。

大内田：先ほど STAP の時と全然違うとおっしゃいましたが、表にしてまとめてみました（表 1）。まず、STAP の時と全然違うのが、この赤字で書かれている部分です。最初の報道の仕方が、全然違いました。小保方氏の STAP の方は、1 月末の大々的な報道に加えて小保方氏個人についてフォーカスした記事が多かった印象があります。

一方、iPS 細胞研究所の不正は、プレスリリース、記者向けのレクチャーをしたのです

表 1 2 つの論文不正を比較した表^{1) 2) 3)}

STAP細胞事件 (2014)	iPS細胞研論文不正 (2018)
該当論文(捏造・改ざん) Nature (2014) 505:641–647, Nature (2014) 505:676–680 プレスリリース、記者レク (2014年1月28日) 大々的に報道、小保方氏個人についてフォーカスした記事も	該当論文(捏造・改ざん) Stem Cell Reports (2017) 8(3):633–647 プレスリリース、記者レク (2017年2月22日) するも特に騒がれず
研究業界、一般に注目度が高い。 ネット情報による疑惑が先行 (クライシス)	内部の相談室に疑義情報の報告。 その後、iPS研による会見まで 外部に情報漏れ無し
調査期間 2014年2月20日～2014年3月31日	調査期間 2017年9月11日～2018年1月9日
不正疑義に関する報道(初動)* 東京新聞、中日新聞、NHK 2014年3月10日 毎日新聞など 2014年3月11日	不正に関する報道(初動) 各社2018年1月22日
理研調査委員会による会見 2014年3月14日(中間報告)、2014年4月1日	iPS研調査委員会による会見 2018年1月22日
竹市雅俊センター長(当時)、 野依良治理事長(当時)による謝罪 2014年3月14日	山中伸弥所長(当時)による謝罪 2018年1月22日

が、特に騒がれていませんでした。STAP は最初に大々的に報道されたので、研究業界に加えて一般にも注目度が高くなって、それによってネットスクラムが起きました。先に外部の方から疑惑が始まって、それを追う形で理研が対応しました。最初の記者レクから1ヵ月も経たないうち疑義に関する報道が始まっていて、調査が終わらないうちに中間報告などがあって、調査が終わって翌日すぐ会見をするという形でした。

大内田：一方、iPS 細胞研究所の方は外部に漏れが全くなくて、そのため調査期間がだいたい4ヵ月ぐらいあって、比較的余裕がありました。やはり最初の初動が問題というか、初動のせいで外の世間の注目度が高くなったという現象があるのですけれども、特に小保方さんの個人にフォーカスした記事、例えば、中学生時代の作文の記事ですとか、ペットの亀の記事とか、そういうものが目立っていたという印象で、全く科学的でない記事が多かったと思います。

いま振り返りまして、そういった個人に関する、科学とはちょっと関係ないような記事の報道について、須田さん個人はどう思われますか？

須 田：私は率直に言って、そういった個人にフォーカスする報道が良くなかったとまでは思わないですね。というのは、皆さんご存知のように日本の研究機関というのは女性の研究者が非常に少なく、全部で民間の企業とかを含めても17.5%しかいない⁴⁾。OECD (Organization for Economic Co-operation and Development：経済協力開発機構) 諸国の中で最低レベルなのです。

そういった状況の中で、小保方さんは当時30歳か29歳だったと思うのですが、その若さで研究室をPI (principle investigator) として主宰して、また、Nature に載るような大々的な研究成果を出したということが、もし本当であれば、小保方さん自身に関心が集まるのはある意味、当然ですし、その関心に應えるのもメディアの一つの役割だったのではないかと思います。

大内田：これから CoSTEP でもジェンダーの話ですとか、マイノリティの問題について授業、講義をして行くのですけれども、そういったマイノリティの方の活躍をメディアが誇張して報道するべきだと思われますか？

須 田：私自身は小保方フィーバー的な記事には携わっていないのですけれども、小保方さんの記事に関しては誇張だったかは分かりません……。例えば、研究発表の記者会見後に小保方さんのラボの見学会が開かれたのです。そこに私もカメラマンと一緒に行ったのですけれども、まさに私の目の前で小保方さんが割烹着を出されて、その割烹着の由来、おばあちゃんとのエピソードまでお話ししたというところも見ていたので、逆にそういった話を聞いて書かないという選択肢は、たぶん記者としては無いのかなと。新聞の一面になるような研究成果が出たときには、やはりそれに付随するエピソードは読まれますし、あっても良いのかなという風に思います。

ただ、それが後で不正ということが明らかになってしまうと、「どうだったのかな？」という話にはなると思うのですけれども。

あとは、女性だからというだけではなくて、例えば、これもいろいろご意見があるとは思いますが、私はノーベル賞の時というのは、研究成果だけではなくて、科学

者という職業であるとか、受賞した方の人となりを知ってもらうための良い機会でもあると思っています。鈴木章先生の時も山中伸弥先生の時もそうでしたが、ご家族とか研究仲間とのいろいろなエピソードをノーベルウィークの間にバツと出すんですね。それもまた結構、読まれるのですが、そういった報道は常に必要というものではないのですが、時にはあって良いのかなという風には思っています。

大内田：そうですね。でも、それで理研が、論文の不正に対する疑義よりも STAP 細胞の検証実験を優先させた問題があります。それは世間が小保方さんフィーバーで、関心が STAP 細胞があるか無いかのほうに注目が来てしまったせいで、理研だけの問題ではない気がするのです。世間の圧力で、理研がそうせざるを得なかったというような流れがあるかと思うのですが。

須田：そこは難しいですね。ちょっと斜に構えた見方かもしれないですけども、私は理研が社会の関心に乗ったと考えています。本来は論文検証とか、不正の全容解明ということに全力を注ぐべきだったと思うのですが、社会の関心が STAP 細胞があるか無いかということとこちらに向かっているときに、そこに乗ってしまった。

そして、あわよくば STAP 現象が検証実験の中で本当に再現できるかもしれないというところに、かなり期待していたとも思うのです。もし、再現できていた時にどうなったかというのは想像するしかないですけど。

でも、そこでちょっとやはり道を間違えてしまった。それは社会の関心がそっちに向いていたという、その圧力だけではなくて、そこに乗ったということは少なからずあるのではないかなと思います。そこはでもどうでしょう、中の人にはまた違う意見かもしれません。



お話しする須田さん

2. 組織の中のサイエンスコミュニケーターの役割

大内田：次に考えたいのが、組織の中からの発信についてです。私も、前も今も組織の中にいるサイエンスコミュニケーターで、今日参加している CoSTEP 受講生も、今現在何かしらの組織に所属していて、修了後も組織の中のサイエンスコミュニケーター、あるいは別の肩書で働かれる人が多いかと思います。

ここで、STAP 騒動のときに理研広報担当として対応された南波先生による「科学コミュニケーションと組織広報」⁵⁾についての見解を参考にさせていただきたいと思います。実は今日（南波先生が）いらっしゃると聞いて、すごく緊張しているのですが、組織の中のサイエンスコミュニケーターは広報という役割も持っていて、その中は科学コミュニケーションという枠組みと、組織広報という枠組みの両方の側面を持ちます。それぞれ扱う情報、判断基準、専門性が異なり、研究がイケイケドンドンの時は何の問題もないので

すが、STAP の時のように問題発生時は両者の間で価値や利益の相反が生じてしまいます。組織から発信するものには、しがらみというか、組織の中の承認を経て発信するというような仕組みが存在するのは、現実的にあると思います。

須田さんは、STAP 細胞騒動のときに「理研の対応が、科学者の倫理より組織の論理を優先させたように見えて失望した」と言われていましたが、科学ジャーナリズムの在り方としては、組織の公式見解を待つべきだと思いますか？ それとも、もう内部に入り込んで内部の声を世間に一早く届けるのが科学ジャーナリズムの在り方だと思いますか？

須 田：基本的には、後者だと思っています。というのは、発表されたものをただまとめるような記事を書くときに、私たち記者の間では「縦のものを横にする」とよく言うのですが、それだけが仕事だとすると、たぶん記者という職業は、今後、無くなってしまうんですね。たぶん AI の ChatGPT にもできる仕事なので、やはり、特に STAP の時というのは、さっきお話ししたように理研は明らかに早期の幕引きを図っていたという状況がありました。また、その論文の全容解明よりも STAP 現象の再現に注力していたという状況もありました。

それに対して、私だけではなく、科学ジャーナリスト、科学者、研究者の中でも危機感が募っていたのです。そういった状況で発表を待っていたり、発表されたことだけを報道したりしていたら、たぶん科学記者という仕事は必要なくなります。科学者と科学に限定する必要もなく、「そもそもジャーナリスト、ジャーナリズムって何？」という話にもなると思います。

たぶん、おそらく組織の中にいらっしゃる方にとっては、発表前に記事に書かれるというのは非常に大きなストレスだったと思いますし、私自身も「何であんなことを書くんだ？」「発表まで、なぜ待てないんだ？」ということは何度か言われました。STAP に限らず、そういうことはよくあります。

もちろん、発表する・しないというのは組織が決めることですが、記者というのは本来、発表されるか否かによらず、大事だと思ったことを取材して伝えていくというのが仕事ですので、発表を待つという選択肢は無かったと思います。

大内田：公式発表を待たずに発表する情報の正しさは、どうやって見極めるんですか？

須 田：そこは本当にケースバイケースです。そこが一番難しくもあるのですが、やはり一人の人の話だけでは書かないということ。できれば紙なりデータなり内部の資料を入手するというのが、取材の過程でも一番、主眼にあったのですけれども、そういったものがあるというのは、まず一つ大きいですね。話だけでは書かないというのは、かなり重要なことです。

話だけで書かざるを得ないとき、例えば、研究環境のような定性的な話の時には、いろいろな立場の人から聞くことも大事です。さらに、情報提供を元にかく場合は、情報提供される人の意図が必ずあるのです。あるからダメということではなくて、その意図が何かということを見極めて、提供された情報にその人の意図が入り込んでいないかというのを注意深く精査する。そういった作業も必要になってきます。

3. プロフェッショナルリレーションシップ

大内田：ありがとうございます。その見極めと関連があるのですけれども、最後にお聞きしたいのがステークホルダーとの緊張感のある関係です。

須田さんは、科学ジャーナリストとして自分からどんどんアプローチして情報源を広げてこられたかと思います。取材者への距離を縮めているようでありますが、慣れあいになるのではなくて緊張感のある距離感を保って取材されていて、それによって余計な思い込みや情を無くして中立に報道されてこられました。これは、科学を一般に正しく伝えるサイエンスコミュニケーターにも参考になるアプローチかと思います。取材を受ける側は、取材者への信頼があるからこそ取材に真摯に向き合って情報を隠さずに出したり、あるいは取材をせずともリスクを冒してまで情報提供をするのだと思います。

実際、そこまでの信頼を得るステップというか、やってこられたことがあるかと思うのですけれども、ぜひ参考にさせていただきたいと思ひまして、どういったことをされていったか共有いただけますか？

須田：信頼していただける場合もありますし、信頼していただけない場合も、もちろんあります。未だに本当にお恥ずかしい話ですけど、「何でそんな不勉強のまま来るんだ」と怒られることも、何年かに1回はあります(笑)。やはり貴重な時間をいただくので、そういうときは非常に反省するのですけれど。あとは、研究者の方々は、私を知るために話してくれるというよりは、その先の社会に伝える役割が私にあるということを知った上で話をしてくださるのです。その思いに応えるための最低限の努力、それは予習をするとか、良い質問をするとか、そういうことだと思うのですけれど、そこは努力を重ねていきたいなと思います。

あともう一つは、大内田さんがおっしゃったようなSTAPのような問題の時は、相手の方が望んでいないこと、書いてほしくないことを書かざるを得ない時もあるのです。

また、記者会見の場で、信頼関係があって、顔も知っていて、それまで何度もいろいろな取材上での付き合いがある方に対して、その人が質問されたくないことを質問しなければいけない時もあります。それは私も人間なので、非常に心苦しいというか、辛い時もあるのですけれども、やはり心を鬼にしてやらなければいけない。

それによって、もしかしたら一時的には相手の方を怒らせてしまうかもしれないし、嫌われてしまうかもしれないですね。実際、そういう事は多々あります。でも、私は、実はアメリカに留学しているときに、STAPの話を一度、講演と言うと大げさなのですが、少しお話しした時に、会場にいた方から「それはプロフェッショナルリレーションシップですね」と言われたんですね。相手も研究者というプロフェッショナルですし、こちらも記者、ジャーナリストであるというプロフェッショナルとしての意識を持っていなければいけない。お互いに自分の仕事というのを全うする上で、そういった一時的にお互い辛いやり取りなり、相手が望まない報道をしなければいけないということをプロ同士として認識しあって、ちゃんとコミュニケーションをしていくということが大事だと思います。そこで慣れあってしまうと、それこそ一時的には好かれて、「この人は自分が思うようなことを思うように報道してくれる、ありがたい存在だ」と思われるかもしれないのですけれども、長期的には、記者としては甘く見られてしまうと私は考えています。

大内田：プロフェッショナルリレーションシップ。まさにその関係性がお互いの役割を真実に働か

せる鍵となるのですね。最後に重要なメッセージをありがとうございます。

注

- 1) 須田桃子 2015:『捏造の科学者 STAP 細胞事件』文芸春秋.
- 2) 理化学研究所 2014:「研究論文 (STAP 細胞) に関する取組み, 情報等について」
https://www.riken.jp/pr/news/2014/20140327_1/ (2024 年 2 月 13 日 閲覧)
- 3) 京都大学 iPS 細胞研究所 2018:「研究活動上の不正行為に係る調査結果について」
<https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/pressrelease/other/180122-181000.html> (2024 年 2 月 13 日 閲覧)
- 4) 総務省 2021:「科学技術研究調査」より.
- 5) 南波直樹 2015:「STAP 問題から何を学ぶか: 広報の視点から」JJSC No.18.